

「自立した読者」概念とその育成に関する一考察

武田裕司
(2015年10月5日受理)

An Examination of "Independent Reader" Concept and Developing

Yuji Takeda

Abstract: In this paper, When it is focused on the terms "self" of readers, what readers or have been aimed at the development of, and also should aim. This will be the purpose of this paper to be discussed. As a method, after you organize for the previous research, we discuss study and its development of "independent readers" concept using the "The Dialogical Self" concept.

Key words: independent reader, the dialogical self, reading

キーワード：自立した読者, 対話的自己, 読むこと

0. 問題の所在

哲学者の渡邊二郎は、自身の著書の冒頭において「自己を見つめる」ことのもつ意味について「私たちは、自己自身をよく見つめねばならない。この世で人生行路を歩んでいるのは、まさに私たち自身だからである。」(渡邊, 2009, p5-6)と述べる。このことは、なぜ「自己」というものが重要課題として取り上げられるのかという問題に対して端的に答えているといえるだろう。つまり、「生きる」中における様々な悩みや課題、また自分の人生というものを見つめることや思索すること、そして創造するにあたって欠かすことのできないものであるからである。

しかし現代社会においては、このような「自己」をとりまく問題は複雑化しているといえるであろう。心理学者である溝上慎一は現代におけるアイデンティティの姿が「複数化・断片化・流動化」していることを指摘し(溝上, 2008), また社会学者の船津衛は「他者の過剰」と「自己の不確実感」によって「アイデンティティの喪失」を経験するようになってきていることを指摘している(井上・船津, 2005, p7-9)。また、学校の「教室」という場においても上に述べたようなことが問題とされている。社会学者の土井隆義は子ども同士の人間関係の拘束力の強まりやスクール・カー

ストの形成といった現在の状況を基に、子どもたちが「キャラ化」することによって生きぬこうとしていることを指摘している(土井, 2009)。しかしそこには「その場の空気を読んで、ウケをねらう」といったように、その場の他者の評価を得ることによってはじめて自己承認を得ることができるという問題点も潜んでいる(土井, 2009, p14-15)。

このような現代社会の中において、教室における読むことの指導においてはどのような読者を育成していくことが求められるのであろうか。このことについては、読むことの指導においてはこれまで「自立した読者」の育成が目指されてきたといえるだろう。様々な言説や言及が見られるが文学的文章の読むことの指導に関してはその目標をより詳細に検討する必要があると言えよう。

では、読者の「自己」という面に焦点をあてた際に、どのような読者の育成を目指してきたか、また目指すべきか。このことについて考察することを本稿の目的とする。

1. 文学的文章の読むことの指導の目標の検討

文学的文章の指導においてはどのような目標が設定

されてきたのであろうか。永田麻詠(2007)においてはそれまでの学習指導要領を「自己」という概念から再検討しており、そこでは「自己形成」や「自己向上」が求められていることが述べられている。

また、国語科教育研究の成果とこれからの課題についてまとめられた『国語科教育学研究の成果と展望 II』において山元隆春(2013)は、小田勉夫の言を引きながら、これまでの読むことの学習指導研究における目標が「教材中心主義と学習者中心主義の両極をゆれ動く振子のような展開」を持つものであると言える。」と述べている。このような展開のなかで現在の読むことの指導においては「自立した読者」の育成が目指されていると言える。このことについて山元隆春(2014)は以下のように述べている。

子どもを「自立した読者」に育てていくことは、学校教育における読むことへの教育、ひいては国語教育・リテラシー教育の重要な目標です。さまざまな立場や考え方はあるとしても、子どもを「自立した読者」として育てていくことそのものが否定されることはないと言ってよいでしょう。(山元, 2014, p204)

このように、読むことの学習指導の目標として「自立した読者」へと育てていくことが目指されていることが述べられている。この「自立した読者」概念の内実について考察する必要がある。山元隆春(1994)はこの「自立した読者」概念について、「社会生活の中で、一人で読むための力を子どものものにしていく」ことを読みの教育の意義として重視しており、「自立した読者として学習者を育てていくには、読むことについての意識を学習者の内に育てていく必要がある」ことを述べている(山元, 1994, pp29)。このような「社会生活の中で、一人で読むための力」については、「文学との庶民の関りの多くは、文学作品を「読む」ことである。「読む」ことによって自己について眼をひらかされ、自覚していなかった自己の歪みや感情を知る。現実に眼をひらかされ、人間社会の営みとそのあるべき姿について考えを導かれる。」「私は、文学作品を読むことは、登場人物とともに虚構の世界に転生して、これまでとは違った生き方を生きることであると考えている。自己と異なる生を生きることによって、矛盾葛藤を生じたり、これまでの生を洗い流すような再生の体験をしたりする。その新しい体験が人生への発見をもたらす、生への絶望を生んだり希望を生んだりする。現実世界とは異なる体験がその後の生き方を豊かに広やかなものとするのである。文学作品を読み

つつ新しい世界(人間観)へ分け入っていく体験が感動の体験なのである。」(浜本, 2001, p223)などをはじめとして多くの研究者によって「自らを見つめ、自らの生きる社会について考える」ことの重要性について述べられてきた。しかし一方でどのようにすれば「一人で読む力」を学習者につけることができるか、その手立てについては未だ課題が残されているといえるであろう。

このような問題意識から、「自立した読者」概念と「自己」との関係性について検討し直す必要性が合うと考える。

2. 現代社会との関係性のなかで「自立した読者」概念を捉えなおす

現代社会における「自己」の問題性については、社会学者・心理学者らが多くの言及を行っている。ここでは「自己」の複数性や流動性について考えていく必要について述べられている。

変化・変動の著しい現代社会において、心理学の領域では「アイデンティティの喪失」が問題とされ、このような状態において「自己」を問うことによって「自己否定」や「他者否定」へとつながることが指摘されている。船津によると、このことは「他者の過剰¹⁾」と「自己の不確実観²⁾」が大きく影響しており、他者の存在がきわめて大きくなってしまふことによって過度に他者性を帯び(他者の過剰)、自分のことがよく分からなくなる、または自分が自分でないという「自己の不確実観」が強くなってしまふとされている(船津, 2005, pp9-10)。現代社会を生きる上で、人はその場その場に合わせた自己を選択し、また流動的に使いこなしているとも言えるであろう。この問題に対して梶田叡一(2012)は、「いずれにせよ、そうした深い心理的立脚を欠いたままの変身また変身であるならば、時期によって、あるいは場によって、状況に対する迎合・同調を基調とした姿をとっていく、ということではしかない。そのような人であるならば、まさに「カメレオンの人間」と呼ぶ他はないであろう」と述べる。ここで梶田は先に述べたような「どうにかその状況をやり過ごす・潜り抜けるためだけにそれに合わせた自己に変身」においては「深い心理的立脚」が欠如していることを指摘している。そしてそのような状態での変身のことを「カメレオンの人間」とし、「私」というものの喪失へとつながる、もしくはアイデンティティの捉え方が表層的なものとなることを非難している。これに対して梶田は「深い心理的立脚」が必要であると述べる。このことについて梶田は「ど

んなに役割・立場が異なろうとも自分自身の心の奥にある〈実感・納得・本音〉といった心理的基盤」といった「その人に独自固有な何らかの一貫性」をもつことによって「カメレオンの人間」になることを防ぐことができる」と述べている。

溝上（2008）もポストモダン社会に見られるアイデンティティとして、ガーゲンの「飽和した自己³」、リフトンの「プロテウスの自己⁴」、マーシャの「文化的に適応した拡散型アイデンティティ⁵」に共通するような、複数化・断片化・流動化したアイデンティティ観を指摘している。そしてそこで重要な事柄としてアイデンティティ形成の場が「多」領域化していることを挙げ、このことにより「全体として首尾一貫したまとまりのある自己体系へと回収されないアイデンティティ状況が生み出されることとなる」と述べている。つまり、さまざまな領域においてあらわれる多様な役割や自己定義を同じ水準において調整するという新たな課題が立ち現れることとなる。

このような「私」を復権させるものとして「創発的内省」の重要性が指摘されている。以下にこのことについて船津衛（2005）の言葉を借りながらより詳しく見ていくこととする。

「創発的内省」とは「他の人間の目を通じて客観的に自分の内側をふりかえることによって、そこに何か新たなものを創発すること」であるとされる。ここでは人間のコミュニケーションを他者との「外的なコミュニケーション」と自分自身との「内的なコミュニケーション」とにわけ、さらに「内的コミュニケーション」の内実を、対象を自分に表示する「表示」と表示されたものを取りあつかう「解釈」からなる「自分自身との相互作用」であるとしている。この「自分自身との相互作用」において、「創発的内省」が行われているとされている。

このように、「私」を認識することを静的なものとして捉えるのではなく、他者との関わりの中の動的なものであると捉える必要があるだろう。そして、他者を「外的コミュニケーション」によってとらえることに終わるのではなく、「自分自身との相互作用」における「創発的内省」によって「他者の期待の修正・変更・再構成がなされ、そこに新しいものが生み出される」ことに「私」の復権が関わってくるとされている。つまり、ある一貫性をもったうえでの「変身」が必要であると述べられており、このことは先に述べた自分自身との「内的なコミュニケーション」と関わってくるものであろう。その場をしのぐための、一貫性をもたない「カメレオンの人間」では「創発的内省」は生まれず、読者（学習者）が「内的なコミュニケーシ

ン」において他者からの期待を自らによって調整・修正するところに、また何らかの一貫性をもつものとしてその調整・修正を自覚することによってこそ「創発的内省」が生まれると言えるであろう。

3. 「対話的自己」概念に関する検討

では前章において述べたような「創発的内省」を引き起こすためにはどのようにすればよいのであろうか。このことについては「創発的内省」概念を提唱したミードの言葉では説明されつくしていない部分であると言える。つまり、自らの外部にあるものを自らの内部に取り込み、自己内の複数の自己同士の自己内対話によって「創発的内省」が引き起こされるとは述べているものの、では具体的にどのような方法によって「創発的内省」がおこるのかということについて課題が残されていたと言えるのである。

このような課題に対して、それを乗り越えようとする形で登場した概念がハーマンスらによって提唱された「対話的自己」概念であると言えるであろう。

「対話的自己」論はハーマンスらによって1992年に発表されたものであり、2006年に溝上らによって訳書『対話的自己—デカルト／ジェームズ／ミードを超えて』が出版され日本にも紹介がなされている。

この「対話的自己」論は、W. ジェームズや G.H. ミードらの自己論を基としながら、そこに M. パフチンの「多声性」の考え方を統合させた自己論である。「自己」を「複数の I ポジション」として捉え、またその I ポジションを移動しながら、他の I ポジションとの間で対話が行われると説明する。I ポジションとは下の図に黒丸（●）で示されているような様々なポジションのことである。「対話的自己」論の特徴として、ハーマンスらは著書の中で以下のように述べる。

「全知の一極集中化された I が存在しないという限りにおいて、自己とは分権化されたものである。というよりも、「分権化された多声性 decentralized manyness」の I ポジションであり、それぞれの I ポジションは声もち、それぞれの Me についての独自のストーリーを語るができる。I は想像上の風景のなかを、多声的な自己における対話的關係が可能になるような仕方、あるポジションから他のポジションへと移動するのである。」

(H.Hermans&H.Kempfen, 2006, p6)

ここでは2点のことが強調されて述べられている。1点目は「自己の世界に存在するさまざまな「私」、

他者、モノを「ポジション (position)」として変換する点」,そして2点目が「変換されたポジションどうしの関係を、「声 (voice)」によってつなぐ点 (対話的關係)」である。これらのことを、ハーマンスらが報告したアリスの事例⁶を用いて検討することとする。

まず調査者は被験者に対して自分の人格の二面性を挙げるように依頼する。その際にアリスは自分自身を「開放的」な人間であるとみなしており、周りの人間もそのように自分を見ていると述べる。しかし一方で自分でも受け入れがたく、他人にはあまり見えない別の側面として「閉鎖的」な側面も存在すると述べている。この側面は「開放的」な側面としばしば葛藤を起こすものであることもアリスによって付け加えられている。ここでの「開放的」な側面としての私と「閉鎖的」な側面としての私それぞれが先に述べたIポジションにあたるものである。このようにハーマンスらは自己を分権化された複数のIポジションであると捉えている。

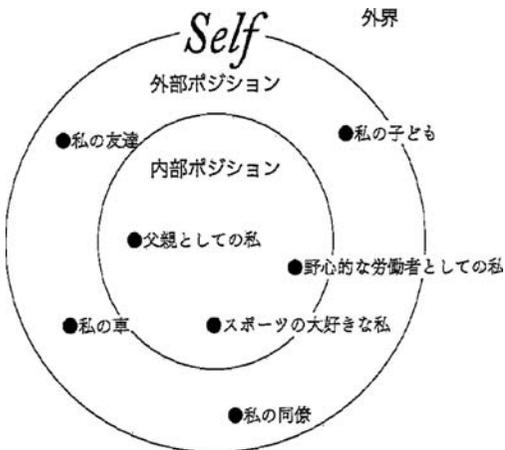


図1 対話的自己における内部・外部ポジションと外界

ここでのアリスの事例では「開放的」「閉鎖的」という二つのIポジションのみが取り上げられているが、その他にもさまざまなIポジションが考えられる。以下の「対話的自己における内部・外部ポジションと外界」は自己内における様々なIポジションのイメージを图示したものである。ハーマンスらによれば自己の世界は大きく二つの円世界 (内部ポジション / 外部ポジション) にわけられる。「内部ポジション」は「私」だと感じられるさまざまな「私」ポジションを示し、「外部ポジション」は「他者ポジション」「モノポジション」と呼ばれるものを示す。このように自己の世界に存在する様々な位置をとることができる点に特徴が見られ

る。このように自己世界が分権化され、さまざまな自己を認めつつ、そこにポジショニングして「他者」である他のポジションの「自己」と対話することによって自己形成がなされると考える点において、これまでの自己論を超え、意義のあるものであると考えられる。

このような「対話的自己」論を基として、溝上はポストモダン社会における青年期アイデンティティは二重プロセスによって形成される点に特徴があると述べる。

つまり、第一のプロセスは特定領域における自己定義の形成であり、第二のプロセスはその特定の自己定義間の葛藤・調節という意味での統合形成である。人によっては自己定義間の葛藤を抱きながらも、とりたてて第二のプロセスに移行して調整せず全体のアイデンティティ形成となることもあるが、人によってはそこから第二のプロセスを加えて徐々に全体のアイデンティティが形成されることもある。(溝上, 2008, p147-148)

このようなアイデンティティ形成がなされた具体例として溝上は、イスラエルのアイデンティティ研究者シャヒターの実証的検証を具体例として説明する。

シャヒターは、正統派ユダヤ教を信仰する青年のアイデンティティ形成をテーマに事例研究を重ねている。彼らは将来、宗教的な実践家やユダヤ教の教義を教える教師になりたいと願って勉強をしている若者たちである。シャヒターが問題設定するのは、正統派ユダヤ教は婚前交渉を厳格に禁止しているのだが、近代化の波を受けた世俗の価値や信念、そのなかでもとりわけ異性との関係が、信仰に厚い青年たちをかなり苦しめている、という状況である。性情報の氾濫 (テレビや雑誌, 本, 映画, インターネットなど) も先進国と変わりなく存在する中で、彼らが教義を逸脱しない正統派ユダヤ教信者であり続けられるかどうかを、このポストモダン社会の状況は試しているのである。ここで対象とされる青年たちにとって、宗教領域は職業領域とほぼ同義だとみなしてよいものであるが、問題はその職業 (宗教) 領域における自己定義と真っ向から矛盾する異性との付き合い方、とくに性的な関係をどう考えるかである。関連する部分だけを説明するならば、宗教心の厚い青年の中にも教義を犯して異性との性的関係を持つ者が少なからずいるようである。それは、職業 (宗教) 領域における自己定義と異性領域における自己定義との真っ向からの矛盾・葛藤を意味する。

しかし、実際には社会的にまったく相反するこの二つの価値を、自己の中ではうまく処理して調和をはかる統合形成が確認されている。例えば、宗教は宗教、つきあいはつきあいといったように割り切りをして、矛盾する自己定義を同時に抱えたまま統合状態へと至る場合、あるいは、教義上禁止されている婚前交渉が実に信仰と近い神秘的感覚を引き起こすものであり、自分にとっては信仰の一種だとみなす場合などがそうである。どちらも客観的な矛盾を解消しているわけではないのだが、認知的方略（認知的に問題を解決する方法）によって結果的には解消している。どのように対処するかの方略は他にもあるかもしれないが、ここでおさえておきたいのは、特定領域における矛盾した自己定義間の解消プロセス（第二プロセス）こそが、ポストモダンのアイデンティティを強調する二重形成プロセスの傍証となるということである。（溝上、2008、p149-150）

このように「自己定義の形成」と「自己定義間の葛藤・調節」という意味での統合形成」という二重プロセスをふまえてアイデンティティ形成がなされるとしている。溝上はその中でも特に「自己定義間の葛藤・調節」という意味での統合形成の重要性を述べるとともに、このような統合形成には様々なパターンが確認されており、このようなパターンの可能性がより追究されるべきであると指摘している。

このようなアイデンティティの形成プロセスを検討する上でも先に述べた「対話的自己」論という考え方は非常に重要であり、有効であると考ええる。

4. 自己内対話を活性化するための文学的文章

ここまで「対話的自己」論の概要について検討してきた。このようなさまざまなIポジション間の対話を活性化するための文学的文章の価値があると言える。「自己内対話」という観点から文学的文章の持つ価値について考察したのもとして丹藤（2001）と山元（2005）によるものが挙げられる。

丹藤（2001）は文学的文章の「他者性」に目を向け、その事が読者と文学的文章との対話を促すものであるとして以下のように述べる。

われわれの日常の言語活動あるいは読むという行為において、主体は〈わたし〉の内部にあるのではなく、他者という外部にあるのだとすれば、対象となるテキストにおける〈主体〉とは何かを明らかに

しておかなければならない。（中略：稿者）作品のプロットを無視したり、コンテキストをねじ曲げたりする読みに他者は浮上してはこないだろう。作品を自己化するのではなく、対話の相手としての作品の〈主体〉を立ち上げる（措定する）必要がある。（丹藤、2001、p164）

つまり、文学的文章が読者と「対話」関係になることを認めつつも、一方で文学的文章とどのように向き合うことで「対話」関係になるのか、また自己内対話を引き起こすことになるのかについて検討しようとしたものであるといえよう。

このことについては山元（2005）も以下のように述べている。

文学の授業において、そのような相互作用を導き、〈対話〉を成り立たせるためには、さまざまな条件が必要となる。たとえば、前節で検討したように、テキストの〈対話喚起性〉を捉えて、それをきっかけにして教授＝学習を構成していくということは、テキストと学習者との相互作用過程を活性化していく上で十分に意味のあることである。（山元、2005、p624）

山元は「個としての読者の、教材との一対一」の〈対話〉を「内的〈対話〉」、「他者である教室の仲間の「読み手たち」との間に生ずる対話」を「外的〈対話〉」であるとして、文学的文章はこれら「内的〈対話〉」「外的〈対話〉」を導く属性を持っているとし、これを文学的文章の〈対話喚起性〉と呼んでいる。このようにして喚起された自己内対話によって生み出されるものとして、山元は以下のように述べている。

ぶつかりあい、というのは闘いという意味ではない。そうではなくて、異なるものが併置されることによって何ごとかが産み出されるありさまを言うのである。学習という営みは、おそらくそのようなぶつかりあいが個人内であるいは個人間でなされることによって進んでいくはずのものである。もちろん、〈認識の変革〉というふうな強いことばをここで用いようとは思わないし、自らの現在の水準を超えるものに出会って、それをすぐに自分のものとしていくかたちで学習が進んでいくというふうにも考えてはいない。（山元、2005、p624）

異なるもの同士が自己内において対話することによってこれまでにはなかった新たなものが生み出され

る場合もあるという点が述べられている。常に新たなものが生み出されるというわけではなく、そこに可能性があるという部分が重要であろう。このような自己内対話が活性化される条件に関して山元は以下のように述べる。

主体の内部で〈対話〉がはぐくまれるのは、主体の内部に〈複数性〉が存在するからにはかならない。主体の内部に統合することの困難な〈複数性〉が生じ、それを統合しようとする心の動きが生まれるからこそ、主体の内部は活性化される。(山元, 2005, p625)

「内省のフォーラム」とは、「内省」による自己内部での話し合い過程のことだ。そうした自己内の不均衡なり、矛盾・葛藤なり、衝突なりということが「自我の成長」を招き、「新しい対象に対応する新しい自我」を生み出す、というわけである。(山元, 2007, p296)

ここでは、複数の自己同士が対話を行うことによって「不均衡・矛盾・葛藤・衝突」を引き起こすことで、自己内対話が活性化され、新たな発見や自らに関して深く思索することにつながるとされている。このような「不均衡・矛盾・葛藤・衝突」といった、自己内対話を活性化させるものとして、文学的文章に価値があることを丹藤・山元は述べているのである。

上に取り上げた丹藤(2001)や山元(2005)は、文学的文章の〈対話喚起性〉という観点から読者の「自己内対話」について言及していた。

このことは文学的文章を読むことの価値について考える際の重要な手がかりであると言える。自己の複数性・流動性が盛んに問題とされる現代社会において、そのような性質をもつ「自己」に目を向けて「よりよい」自己を構築していく際に、文学的文章を用いた読むことの指導は大きな意味を持つと言える。

5. 「自立した読者」の育成に関する検討

3章においては、「創発的内省」の重要性について述べた上で、その「創発的内省」を引き起こすために「対話的自己」概念を用いることの必要性について述べた。

また4章においては、文学的文章がそのような自己内対話を引き起こす〈対話喚起性〉を持つものであるとして、その意義について論じてきた。

読むことの授業における「自己」をめぐる問題に関しては、国語教育研究の領域においても森美智代

(2013)によって「当事者性の欠如」として取り上げられている。森は文学作品に対する読者の「対象化」について取り上げ、その問題点について以下のように述べている。

すなわち、当事者意識の希薄な、また、出来事を形式的・表面的のみに捉えて評価を下すような学習者である。(中略：稿者) 軽重こそあれ、自身が関わる出来事に対して他人事であるかのように捉え、外在的な基準において評価を下すような学習者ばかりを育てるわけにはいかない。そうではなく、私たち教師は、出来事に対して、当事者として向き合うことのできる学習者を育てたいと願っているのである。

「対象化」に関しては住田勝他(2001)において詳細な考察がなされている。森の問題意識はそこで示された、物語世界に対するスタンスのおおまかな三段階の発達モデル「[素朴な参加](住む)→[人物への同化](なる)→[全局的な視野の獲得](見る)」における「見る」のような、学習者に物語世界を「対象化」させる体験だけを安易に進めることが学習者の「当事者性の喪失」につながっているのではないか、ということからくるものである。

しかしこのことは住田によって示された「対象化」を批判しているものではなく、むしろ山元隆春(2005)に示されたような、参加者のスタンスと観察者のスタンスの両者の螺旋状モデルの有りようについて検討したものであると捉えるべきであろう。つまり、「同化」と「対象化」の相互作用について明らかにしようとしたものであると言える。同化によって「読者が作中の登場人物や語り手に不用意に同化してしまうという問題」と対象化によって「当事者意識の希薄な、また、出来事を形式的・表面的のみに捉えて評価を下すような問題」をどのように乗り越えていくのが森にとっての大きな課題であったと言えよう。このように「当事者意識」が欠如している場合、学習者の自己内対話において不均衡や矛盾、葛藤や衝突といった「自我の成長」を生み出す局面が発生するとは考えにくい。いかに学習者がものごとに対して当事者として向き合っていけるように指導するのか。またそこで自己内対話において不均衡や矛盾、葛藤や衝突を経験させることができるかを考えていく際に「対話的自己」概念が大きな手掛かりとなるものであると言えよう。文学的文章の指導においては、以下のような問題点が長らく指摘され続けてきた。

以上のこと（難波の行ったアンケート調査に対する考察のこと：稿者補）は、「個人とは独立した一つの自己である」という近代自我論へのアンチテーゼであり、従来の読書行為論や国語教育論の再考を強く促していることを示している。私たちは、「自己内対話」の促進といいつつ、国語の授業において、「自己内の他者」の声を奪う企みを進めてきたのかもしれないからである。（難波,2008,p160）

このことは、学習者が教師の意図を汲み、そこから外れないように自己を表出させることや、また教室において他の学習者らを気にして「本当の」自己を隠して、本意ではない自己を表出させるといった問題を指摘するものである。このことは難波によって「常に教師の監視と評価にさらされている」とも言いかえられているが、なにも教師相手に限ったものではなく、他の学習者同士においても同様のことが言えるだろう。

しかしながらこのような問題点に対して、「対話的自己」概念を用いながら様々な異なる自己の存在を認め、それを見つめていくと言う営みは、この現代社会において、子どもたちを「自立した読者」として成長させていくことに大きな意義を持つと言える。つまり、複数の自己に目を向けて、絶えずそれらをさまざまな視点から対話させ、それによって新たな自己を「創発」することのできるような読者が「自立した読者」であると言え、その育成においては文学的文章は大きな価値のあるものであると言える。

【脚注】

- 1 「他者の過剰」…他者の存在がきわめて大きくなってしまふことによって過度に他者性を帯びた状態
- 2 「自己の不確実観」…自分のことがよく分からなくなったり自分が自分でないように感じる状態
- 3 「飽和した自己」…ゲーゲンは「我々は永続する同一化的な自己の代わりに、断片化と一貫性のない自己を見出す。…こうしてポストモダンをじっくりと見つめていくと、個人内で首尾一貫して矛盾のない『ほんとうの』自己、『基本的な』自己という概念に疑問を抱くことになる」と述べ、アイデンティティの姿を複数化・断片化・流動化したものとして捉えようとした。
- 4 「プロテウスの自己」…神話に登場する、さまざまな生き物に姿をかえる神から名付けられたものであり、青年期の人間が同様に場や状況に合わせて自己を使い分ける姿をあらわしたもの。
- 5 「文化的に適応した拡散型アイデンティティ」…青

年期課題に対して「探求」はするものの、永続的な「コミットメント」をしないようなもの。

- 6 この被験者であるアリスは非常勤講師として働いている28歳の女性で、ナイヘーメン大学での対話的自己の研究プロジェクトに参加してきた人物であるとされている。（H.Hermans&H.Kempen, 2006, 訳書 p114による）

【参考引用文献】

- 井上俊・船津衛〔編〕(2005)『自己と他者の心理学』有斐閣アルマ
- 土井隆義 (2009)『キャラ化する／される子どもたち－排除型社会における新たな人間像』岩波ブックレット
- 永田麻詠 (2009a)『クィア・スタディーズとしての国語教育の構築－アイデンティファイする学びの提案』広島大学大学院教育学研究科平成20年度学位請求論文
- 永田麻詠 (2009b)「国語教育における自己観の考察－新たな自己観の構築に向けて－」『国語教育思想研究』1号 pp11-20
- 難波博孝 (2007)『臨床国語教育を学ぶ人のために』世界思想社
- 難波博孝 (2008)『母語教育という思想 国語科解体／再構築に向けて』世界思想社
- 船津衛 (2011)『自己とは何か－「自我の社会学」入門』恒星社厚生閣
- 溝上慎一 (2008)『自己形成の心理学－他者の森をかけ抜けて自己になる』世界思想社
- ミード, G.H. 著 河村望訳 (1995)『デューイ＝ミード 著作集6 精神・自我・社会』人間の科学新社
- 森美智代 (2013)「文学体験に関する理論的検討：ルソーによる「解釈から証言へ」の移行に着目して」『国語教育思想研究』7号 pp42-50
- 山元隆春 (1994)「読みの「方略」に関する基礎論の研究」『広島大学学校教育学部紀要 第I部』第16巻 pp29-40
- 山元隆春 (2005)『文学教育基礎論の構築－読者反応を核としたリテラシー実践に向けて－』溪水社
- 山元隆春 (2005)「二 小説の学習指導」『朝倉国語教育講座 II 読むことの教育』朝倉書店
- 山元隆春 (2014)『読者反応を核とした「読解力」育成の足場づくり』溪水社
- 山元隆春 (2013)「4 読むことの学習に関する研究の成果と展望 1 読むことの学習・学習者研究」『国語科教育学研究の成果と展望 II』全国大学国語教

育学会 編 学芸図書 p217-224 2013
渡邊二郎 (2009) 『自己を見つめる』 左右社
E. コリセウ著 / 田中克彦訳 (2014) 『言語変化という
問題 - 共時態, 通時態, 歴史』 岩波文庫

H.Hermans&H.Kempen 著 溝上慎一・水間玲子・森
岡正芳訳 (2006) 『The Dialogical Self 対話的自己
デカルト / ジェームズ / ミードを超えて』
(主任指導教員 山元隆春)